

「宗教改革 500 周年記念日」

2017 年 10 月 31 日

今年の 10 月 31 日は「宗教改革 500 周年記念日」に当たる。1517 年のこの日、マルティン・ルターはヴィッテンベルグの教会の門に「95 ヶ条の提題」を貼り出し、当時のカトリック教会に対し、抗議（プロテスト）した。ルターの抗議は大きな支持を受け、瞬く間に広まり、プロテスタント教会を生み出していった。

ルターを辿る旅をしたことがある。ヴィッテンベルグはザクセン選帝侯都市であり、大学もあった静かな町で、教会は小さく、領主の特別席が二階に設けられ、礼拝堂の床下にルターは埋葬されていた。エアファルトでは、ルターが修道士として 6 年間過ごしたアウグスティヌス修道院の礼拝に参加し、中庭の石畳を歩いた。カトリック教会からの迫害を逃れてヴァルトブルグ城にかくまわれ、聖書をドイツ語に翻訳したルターの部屋と机を見た。時を超えて、同時代を体験するような感激を覚えた。

「95 ヶ条の提題」から始まるルターの主張は、主イエスの福音に従おうとする真理を有し、志を同じくする改革者たちに引き継がれ、プロテスタント教会へと成長させていった。その真理を「宗教改革における三原則」と言っている。言葉は抽象的に発せられるものではなく、時代状況の中から生まれるものである。ルターの言葉も、当時のカトリック教会に対して主張されたものであることを知ることは大切である。

第一の原則は「信仰のみ」である。この原則の対極にあるのは「信仰と善行」である。人の救いは主イエスを信じることと、良い行いによって達成されると説いた。いかにも正論のように思える。しかし、良い行いは力と余裕のある人はできるが、そうでない人はしたくてもできない。その人は救いに与れないことになる。カトリック教会は大寺院を建てるために、罪を赦すという「免罪符」を売り出し、資金を集めようとした。金持ちは買えるが、貧乏人は買えない。提題の 27 条には「箱の中へ投げ入れた金がチャリンと鳴るや否や、魂が煉獄から飛び上がるという人たちは、人間を宣べ伝えているのである」と書いている。免罪符を買えない貧しい人も「信仰のみ」によって救われると説いたのである。日本基督教団の信仰告白は「ただキリストを信ずる信仰により、我らの罪を赦して義としたまふ。この変わらざる恵みのうちに、聖霊は我らを潔めて義の実を結ばしめ、その御業を成就したまふ」と告白している。良い業は聖霊が生み出してくれるもので、救いは善行とは関りなく、「信仰のみ」によって与えられるのである。この原則は、個々人のアイデンティティの承認であり、中世から近代への橋渡しになる根拠となったのである。

第二の原則は「聖書のみ」である。この言葉の対極は「聖書と教会」である。当時のカトリック教会は絶大な権力と権威を持っていた。教会の言うことは神の言葉そのものであった。権力と権威を奢る者は必ず堕落、腐敗する。その堕落と腐敗は目を覆うものであった。ルターは「聖書のみ」と言い、教会の傲慢を否定したのである。そして、ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、民衆が読めるようにした。当時の聖書はラテン語で、司祭だけが読める特権の書であった。自分の国の言葉で、聖書を直接読めるようになったことはキリスト教界を大転換させた。このことの意味は限りなく大きい。

第三の原則は「万人祭司」である。カトリック教会は、罪を悔い改める「告解」を重視した。告解を聞いて祭司は罪の赦しを、キリストに代わって宣言する。宣言できる祭司は絶大な権威を有することになり、彼らの堕落と傲慢を生んだ。ルターは、全ての人が隣人の罪を神に執成すことができる、互いに祭司であると説いた。人間の平等と民主化である。ルターから生まれた三原則の意味を、今日、改めて確認したいと思う。